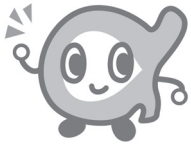


胃を切った人の情報紙

令和7年5月
第471号



ALPHA CLUB

「胃を切った人 友の会 アルファ・クラブ」は、胃を切った人が自らの努力と工夫で術後の後遺症を克服していくことを支援しています。Web サイトもご活用ください。

胃を切った人

検索

<http://www.alpha-club.jp>

■代表理事
青木照明 (東京慈恵会医科大学 客員教授)

■理事
足達洋六 (アルファ・クラブ 個人会員)
上西紀夫 (東京大学名誉教授)
鈴木 裕 (国際医療福祉大学 病院 院長)
高山美治 (医学ジャーナリスト)
梨本 篤 (新潟西浦メディカルセンター 病院)

「終わりのない戦い」の中で得た
「胃切除後の実相」

2020年にコロナで三途の川

を渡りかけ、その2年後に進行胃がん(ⅢB)で、ほぼ胃全摘となりました。ここ数年は心身共に厳しい状況でしたが、「終わりのない戦い」を続ける中で、後遺症との共生に前向きに取り組めるようになりまし

ました。胃切除者の多くは後遺症対策として、①食の管理②精神面の健康維持③社会との接点の模索④家族のサポートへの配慮などに心を砕きながら生活しています。

私もそうした経験を重ねるうちに「私の胃切除後障害の程度は？」どんな課題が残り、それを解決すればQOLは向上するのか。胃切除後障害を測る検査や診断できる物差しはないのか」という疑問が生まれてきました。私は会報のバックナンバーを検索するうちに「PGSAS」という評価ツールを用いて、胃切除者それぞれの胃切除後障害の実相を明らかにし、その改善に取り組む活動に出会い、そのまとめ役の中田浩二先生(川

村病院外科)に「PGSAS診療の実際を伺う機会に恵まれました(本紙1月号「新春対談」)。そこで早速、中田先生に「私の胃切除後の実相」を聞きました。以下にその解説を紹介します

足達氏の胃切除後障害についてのPGSAS評価/中田浩二

胃切除後の主な症状(食道逆流、腹痛、食事関連愁訴、消化不良、下痢、便秘、ダンピング)のうち生活に影響を及ぼすと考えられるスコア3以上の症状は小胃症状などの食事関連愁訴だけでした。足達氏は残胃が著しく小さい(ギョーザ程度?)。幽門側胃切除ルーワイ再建術(幽切)を受けましたが、胃全摘術(全摘)および通常の幽切のPGSAS全国データと比べて、他の症状は同等かやや良好でした。全症状の平均スコア(高値ほど不良)では、全摘2・19、幽切1・92に対して足達氏は1・76と両術式より良好でした。日常生活(補食の必要性、身体活動)への影響は、両術式とは同等で、体重減少率は全摘13・8%、幽切8・9%の

あるふぁ随筆

PGSAS診療がひろく
胃無し人生の新たな1頁



足達 洋六

私は昨年、本会の理事を拝命しました。今、青木照明代表理事や事務局のスタッフと共に本会の大きな目的「会員の皆様への有効な支援の提供と脆弱な財政基盤の健全化」に取り組んでおります。今回のテーマ「PGSAS診療」の普及は、術後「終わりのない戦い」に挑戦している胃切除者にとって有力な武器になります。PGSAS診療を実践する医療施設との連携により、会員の皆様がPGSASを有効に活用できるシステムの構築を進めたいと考えています。

(アルファ・クラブ専務理事)



誤飲で胃を手術することに

― 術後、数々の難関を乗り越った日々 ―

アルファ・クラブ会員 田口 拓哉（42歳）
たぐち たくや



8歳のとき胃を全摘

私は、今から34年前の8歳のときに胃を全摘しました。病気ではなく事故でした。当時でも稀なことだったらしく、そのときのカルテが入院していた病院に保存されていました。そのカルテを手元に綴ります。

家庭で出る廃油を使つて石鹼を作るリサイクルがあります。1989年10月28日、6歳の秋、それに使う苛性ソーダ（水酸化

ナトリウム）を誤飲しました（カルテにはオルソケイ酸カリウムと記載）。たちまち口から赤黒いものを吐き出し、のたうちまつたのを覚えています。

地元の総合病院へ搬送され、そのまま入院。病名は「腐食性食道炎、腐食性胃炎、食道気管支瘻」。幸い一命は助かったものの、口からは何も通らなくなりました。

しばらくは点滴で過ごしていましたが、1ヵ月後にはTPN（中心静脈栄養法）を開始しました。右鎖骨の下辺りから直接体内の太い血管にチューブを入れて栄養剤を投与する手術などが行われましたが、これ以上の治療はここでは難しいということで翌年2月16日、私は愛知県にある小児科専門のコーニー中



外泊許可が出て実家へ（1990年8月17日）

央病院（現愛知県医療療育総合センター中央病院）へと移されました。そこには「さくら学級」という学校施設もあり、学業に支障をきたすこともありませんでした。コーニー中央病院でもさまざまな治療を受けました。

同年3月14日、「胃十二指腸離断術、十二指腸瘻造設」。これ以前にTPNは中止されていました。以降は、十二指腸瘻に付けられたチューブより栄養剤

が入れられました。

「覚悟をしてください」

同年10月24日には、「胸部食道全摘術、気管支瘻閉鎖、頸部食道瘻造設」の手術。この手術が大変だったらしく、食道がいろいろなところに癒着しており、とくに大動脈と密に癒着していた部位は傷つければ即、命にかかわる危険があったそうで、医師に母は「覚悟はしていただく」といわれたそうです。予定時間の倍以上の10時間を過ぎて手術室から出てきた医師の晴々とした笑顔が今でも忘れられないと、母は語っています。

この手術により久しぶりに食べ物を飲み込むことができるようになりました。

翌1990年1月31日に行われた検査で、胃の温存は不可能と判断されました。

1991年2月20日、胃を全摘、頸部食道と十二指腸の間に右結腸と回腸を挿入して食道を再建する手術が行われました。「この手術が終わればご飯が食べられるようになりますよ」の言葉を信じて私は手術室へ運ばれました。

術後は吻合部がしっかりとつながるようにと、動かないように筋弛緩剤使用下で1週間、麻酔で強制的に眠らされていました(その後遺症で私の頭にはいくつかのハゲができました)。

ようやく目が覚めて水が飲みたいと思いましたが、当然ながら、まだ管だらけで吻合部もすっかりとつながったか確認もとれていない状況で、それは無理でした。水を飲ませてと駄々をこねると興奮させては危険だと思った担当医は「小さな氷なら」と本当に小さな氷のかけらを口に含ませてくれました。1年ぶりに得た、喉の先にまで、飲み込んだ冷たい感覚がおなかに流れて行く喜びは一生忘れることはないでしょう。

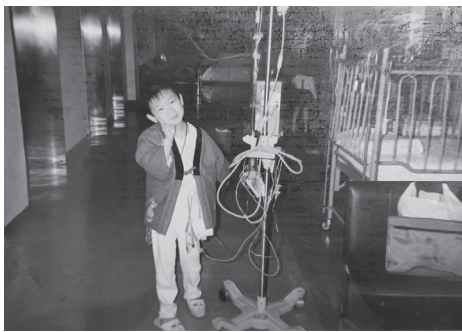
高額治療に医師が尽力

その後は流動食から徐々に固形食へと慣らし、ようやく同年4月1日に無事退院となりました。当時はまだ8歳と、子供の回復力の強さか、頻繁な下痢や腹痛、貧血に悩まされつつも、日々を過ごしました。

新たな問題は中学生の頃に起きました。成長が遅々として進

まず、いつまでも背が低いままでした。当時の記録では14歳と1ヵ月で140cm、35kgほどでした(標準だと162cm、52kg)。どうやら成長する前に胃を全摘したことで、胃から分泌されるはずの成長ホルモンが作られないことによる低身長障害だろうと診断されました。

この治療には高額な費用がかり、先の長期入院の後に母子家庭となっていた私たちには絶望的でした。しかし、そのときの担当医が「望みは相対的に薄いのですが、国に申請してみます」とかけあってくれて、ありがたいことに許可がおりて治療を受けられることになりました。



愛知県春日井市のコロニー中央病院にて
(1990年2月16日)

一人暮らしの生活を楽しむ

治療法は、ほぼ毎日の成長ホルモン剤の注射でした。1年を超える間続きましたが、おかげさまで今は164cmと人並みの身長にまでなれました。その後は好きな運動に出合えたこともあり、体重も少しづつ増加して最大で57kgくらいまで増えたときもありました。

25歳のとき、友人の誘いでリラクゼーション(揉みほぐし)の仕事に転職することにしました。人生初の一人暮らしをすることになった私は、慣れない家事に苦戦しながらも楽しい日々を過ごしました。

職場には男女含め6〜7人のスタッフが勤めていましたが、営業時間が一番遅いときは深夜0時を回ることもあったので、必然的に男性スタッフが夜の当番となりました。

深夜に帰宅後、すぐ寝れば良かったのですが、なかなかそうもいかず、かといって真夜中にできることも限られるため、毎日、晩酌をしては3時や4時過ぎに床につき、お昼頃に起きてゆっくりと時間のかかる食事を

とり、夕方4時から出勤する、そんな日々を繰り返していました。

初めて聞くダンピング症状

しかし、転職により一人暮らしを始めて数年たった頃から体調に変化が起きました。

それまで経験しなかったダンピング症候群が毎食後に起こるようになりました。ネットで症状を検索してダンピングだろうとは思っていたのですが、確定診断を得ようと何カ所か内科医院を訪ねました。

しかし、どこもダンピングとはいってもらえず、整腸薬などを出される程度。最後に行った医院でようやく「ダンピングでしょう」と診断されました。その医師は「最近では胃を全摘する手術も減っているからダンピングについて知ってる医者も少ないのでは」とのことです。実際、その医師も家族に胃がんで胃をなくした人がいたのでよく知っていたといっていました。事実、その医師に会うまで「ダンピング症候群」という言葉は聞かされなかったもので、あながち間違いでないのかもしれない。